

報告書名：要支援・要介護高齢者に対する口臭予防・ケアマニュアルの作成に関する研究 -
口臭専門外来および地域高齢者の口臭の実態調査 -

研究者名：植野正之

所 属：東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野

目的：高齢者に対する口腔ケアに口臭予防・ケアプログラムを組み込むことは、口臭を改善するだけでなく齲蝕や歯周疾患の予防、さらには肺炎の予防、味覚の改善による食欲の回復、ADL や活動性の向上等、高齢者の全身状態や QOL の向上に寄与し、そのことが介護負担の軽減にもつながることが期待できる。本研究の目的は、高齢者の口臭の実態を調査し、口臭発生に影響する口腔内および生活関連因子を明らかにすることである。

対象と方法：東京医科歯科大学歯学部附属病院息さわやか外来（口臭専門外来）を訪れた 65 歳以上の高齢者および神奈川県寒川町において口腔機能向上プログラムに参加した高齢者を対象とした。口臭専門外来においては、口臭についての質問票、口臭測定、安静時唾液量、口腔内診査（舌苔、歯周ポケットの測定）を行った。寒川町においては質問票による調査を行った。

結果：口臭専門外来の対象者は 65 歳以上の高齢者 49 名（男性 21 名、女性 28 名）である。舌苔スコアの平均は面積が 1.91 ± 0.80 、厚みが 1.89 ± 0.84 であった。口臭官能検査で口臭があると診断された者は 71.4%（35 名）で、官能検査の平均値は 2.08 ± 0.83 であった。プレストロンによる測定値の平均は 774.5 ± 743.6 ppb で、口臭があると診断された者は 75.5%（37 名）であった。ガスクロマトグラフィーの硫化水素の平均値は 7.50 ± 8.86 ng/ml で、口臭があると診断された者は 71.4%（35 名）であった。メチルメルカプタンの平均値は 4.84 ± 8.96 ng/ml、ジメチルサルファイドの平均値は 1.10 ± 1.10 ng/ml であった。口臭があると診断された者はそれぞれメチルメルカプタンの場合が 73.5.3%（36 名）、ジメチルサルファイドの場合が 89.3%（44 名）であった。舌苔の量（面積、厚み）が増加するにしたがい、ガスクロマトグラフィーでの 3 つのガス、プレストロン値、官能検査値は増加する傾向にあった。ガスクロマトグラフィーでの 3 つのガス、プレストロン値、官能検査値いずれも歯周病のある高齢者の方が歯周病のない高齢者に比べ高い値を示した。神奈川県寒川町での質問票調査の対象者は 60 歳から 84 歳までの高齢者 31 名（男性 6 名、女性 19 名、不明 6 名）である。舌苔がみられた者は 5 名であり、口臭が認められた者は 4 名であった。中程度から多量の歯垢がみられた者が 4 名であり、顕著な食渣がみられた者が 1 名であった。

考察：口臭の原因としての舌苔の情報や、その除去方法に関して本人に正しい知識を教えセルフケアを勧める必要があると同時に、高齢者の介護者に対しても適切な知識を与えることが重要と考えられた。舌苔の量（面積・厚み）が増えるにしたがい口臭の程度が強くなる傾向がみられ、歯周病のある高齢者の方が歯周病のない高齢者に比べ口臭が強い傾向にあった。寒川町での質問調査結果から高齢者の口腔内の自覚症状として口腔乾燥を訴えた者が一番多かった。口腔乾燥は口臭が強くなるひとつの要因でもあり、口腔乾燥に対する的確な指導と治療の必要性が示唆された。今回、自ら口臭を訴えた高齢者はいなかったが、調査時に口臭が認められた者は 4 名であった。このように口臭の場合本人に自覚症状がない場合が多く、普段生活している介護者や家族からの聞き取りを行えばもっと口臭のある高齢者の数は増えるものと考えられた。